

Title	民族誌家と現地協力者：ウガンダ東部パドラのクラッツォラ神父とオフンビ親子の場合
Sub Title	Ethnographer and native informants : a case of Fr. Crazzolaro and Ofumbi in Padhola, Eastern Uganda(special issuecontemporary cultural anthropology)
Author	梅屋, 潔(Umeya, Kiyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2002
Jtitle	哲學 No.107 (2002. 1) ,p.233- 260
JaLC DOI	
Abstract	The aim of this paper is to make an interim report of my findings to seek the native informants who helped Fr. Crazzolaro's ethnographic research in Padhola, Eastern Uganda. Though some evidences that were available at the starting point of my research suggested that one of the most famous Jopadhola, A. C. K. Oboth-Ofumbi might be the alleged, further biographical research in the field forced me to reject the hypothesis. The most likely person who might have been or have had some communication with the person wanted here is his father, the famous evangelist Semu Kole Ofumbi. He is known as the teacher being to be said to have assisted the research work of the wife of white Anglican Christian called Rampley. Further biographical research not only from the side of Padhola but also from the one of Fr. Crazzolaro and Christian Mission should be planned to solve this puzzlement. The procedure of this detective work gave us to reconfirm the inexhaustible importance of biographical data that can reflect a lot of aspects of circumstances surrounding the person to consider historical events ethnographically.
Notes	特集文化人類学の現代的課題 論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000107-0236

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族誌家と現地協力者

—ウガンダ東部パドラのクラッツォラ神父と
オフンビ親子の場合—

梅 屋

潔*

Ethnographer and Native Informants: A Case of Fr. Crazzolaro and Ofumbi in Padhola, Eastern Uganda

UMEYA Kiyoshi

The aim of this paper is to make an interim report of my findings to seek the native informants who helped Fr. Crazzolaro's ethnographic research in Padhola, Eastern Uganda. Though some evidences that were available at the starting point of my research suggested that one of the most famous Jopadhola, A. C. K. Oboth-Ofumbi might be the alleged, further biographical research in the field forced me to reject the hypothesis. The most likely person who might have been or have had some communication with the person wanted here is his father, the famous evangelist Semu Kole Ofumbi. He is known as the teacher being to be said to have assisted the research work of the wife of white Anglican Christian called Rampley. Further biographical research not only from the side of Padhola but also from the one of Fr. Crazzolaro and Christian Mission should be planned to solve this puzzlement. The procedure of this detective work gave us to reconfirm the inexhaustible importance of biographical data that can reflect a lot of aspects of circumstances surrounding the person to consider historical events ethnographically.

* 一橋大学大学院社会学研究科博士課程

I. はじめに

本稿の関心は、東アフリカの北はスーダンから南はケニア、タンザニアに至るまで帯状に分布している広義のルオ族について詳細な記録を残したクラッツォララ神父の大著『ルオー』第二巻に、次のような記述を認めたことに端を発している。

「運のよいことに私は関心を持ってくれるひとりふたりの教育を受けたジョパドラ（教師）に会うことができ、これを書くための資料を得ることができた。彼らに感謝する。」(Crazzolara 1951: 315, f. n. 1)

その節でクラッツォララは、ルオの一民族集団であるジョパドラ¹⁾の伝承について簡単に報告していた。引用はその冒頭部分の脚注である。

残念なことに、クラッツォララ神父の三巻に及ぶ膨大な報告書は、調査期間や調査地域などの詳細情報については沈黙している。しかし、アチョリやヌエルなどルオの研究にとどまらず、ルグバラ、ポコットなどの文法をも著した神父の超人的ともいえる著作をどのような人物がどのようなやり方で背後から支えていたのか興味を惹かれた私は、現地調査をはじめる前に、それが誰だったのか、いったいどのような調査だったのか、あるいはどのような協力関係だったのだろうかという関心を持ち続けていた。しかし、それは簡単にわかることではなかったし、どこから手をつけてよいのか手がかりさえなく雲をつかむような話であった。従って私はその未知の現地協力者のことは念頭に置きつつ、調査対象としては諦め、全く別のプロジェクトを立てて1997年にウガンダでの現地調査を開始したのであった。

本稿では、この2001年9月までに断続的に行われた冒頭で掲げた現地協力者探しの顛末を報告する。

II. 最初の手がかり

私がジョパドラでの災因論を調査するために住み込んだのは、ウガンダ

東部のトロロ・ディストリクト、キソコ・サブ・カウンティにあるグッラ
グッラ・ボーダーという俗名を持つ小さなトレーディング・センター近辺
である。キソコ・サブ・カウンティの東にあるで、ボーダーの名は、4つ
のLC1 (Local Councils 1. ウガンダにおける最小の行政単位) レベルの
行政区がそこで交わるところから来ている。そこを拠点にした調査を開始
したのは、1997年3月のことである。ここでは、現在より数えて3世代
ほど前（これはいわゆる「植民地化」直前のことである）に、ゲミ・クラ
ンに属するサミア族が大挙して移住し、時を同じくして隣接地域から移住
してきたジョパドラと混交して、言語、儀礼等の文化などはいまではほぼ
完全にジョパドラとして暮らしている。

調査地にもおおよそ慣れはじめた1997年のある日の昼過ぎ、私を一人
の男が訪ねてきていた。男はオボと名乗り、私を認めるや、「ここまでき
てオボス・オフンビのことを調べないとは理解できない、なぜニャマロゴ
(彼の家所在地)を訪ねないのか」とまくし立てた。そして、オボス・
オフンビの著書には私の欲しい情報全てが書かれているから、と付け加え
た。「これをみろ」といって彼が持参したタイプスク립トの余白には、
計算や落書きに混じっていくつかのメモが鉛筆で記されていた。そのタイ
プスク립トのはじめの頁にはPadhola: Comparative Social Struc-
ture. A. W. Southallと打たれていた²⁾。オボス・オフンビ邸から借り出
してきたものだという。

それまでにつくった文献リストを繰ると、果たして一冊の書物が浮かび
上がってきた。*Ludama* (ダマ語) で書かれたと注記のある(ダマとパド
ラは同一の民族集団の異名である)、A. C. K. オボス・オフンビ (Oboth-
Ofumbi) が著した *Padhola*. (1960年刊, Nairobi, Kampala and Dar es
Salaam: East African Literature Bureau.) がそれである。実はその文
献は、日本で作成した文献リストにも入っていたが、現地語で書かれてい
るため読んではいなかった。著者は、アミン政権下で国防大臣をつとめ、

大司教ジャナニ・ルウムともう一人の大臣，エリナヨ・オリエマと三人でアミン大統領の手で暗殺された，あの，ジョパドラ，いやウガンダのルオ系民族なら誰でも知っている，A. C. K. オボス・オフンビと同姓同名なのではなかった．二人の A. C. K. オボス・オフンビは，同一人物だったのである．

III. オボス・オフンビの『パドラ』

改めてすでに読んだつものの文献を紐解いてみると，オボス・オフンビの著作の影響は，あらゆるところにみることができた．ごく限られた層に対してであるともいえるが，ジョパドラの名をある程度認知させたアフリカ歴史学の泰斗 B. A. オゴットが 1967 年に上梓した著書，*A History of Southern Luo, Vol. I: Migration and Settlement 1500–1900* にもそれは容易に認めることができる³⁾．

「1961 年の 1 月から 7 月まで，私はウガンダのイースト・プロヴィンス，ブケディ・ディストリクトに住むパドラの間で調査した．…私はパドラのフィールドワークを，聖書の数節を除いてはパドラ語で出版された唯一の書物を英訳することからはじめた．この本はパドラの「歴史と慣習」についてのものである．著者の A. C. K. オボス・オフンビは，ジョパドラだが，彼のクランであるニイレンジャは，ソガ起源である．その本の歴史に関わる部分は簡単なもので…研究の出発点としては評価できなかったもので，大部分を大雑把に英訳して，ここでは，Padhola Historical Texts, Vol. I として引用されている．…」(Ogot 1967: 21–2)

つまり，ジョパドラではないオゴットが，研究の出発点として英訳して Padhola Historical Text Vol. I. とし，調査の開始時に指針にしようとしたのがオボス・オフンビの著作であった．しかし，そのオゴット作成のテキストの現物は，「著者所有」(Ogot 1967: 22, f. n.17) とのみあり，ページが記載されていても現物がアクセス不可能である以上内容の確認も全く

できない状態であった⁴⁾。

だからというわけでもないが、私はその著書の重要性を認め、パドラ語を習得する目的もあって、それを英訳する作業を開始した。しかし内容の重要性とはべつに民族誌の執筆者で政治家であるという変わった経歴を持つこの著者に対する関心と、著者とクラッツォララ神父との関連についての関心をも持ち始めた。そういった関心のもとに読み返すとクラッツォララの別の論文には、調査地から遠くないかつてのパドラの中心地、ナゴンゲラのミル・ヒル・ファーザーズの協力を得た旨の記述があることにも改めて気づかされることになった (Crazzolara 1937: 18)。

やがて英訳の作業が進むにつれ私はある確信のようなものを持つに至った。オボス・オフンビの著書の第一部にあたる部分は、クラッツォララ神父の報告と、内容も構成もほとんど同じなのである。

それぞれの内容を対照する余裕はここにはないが、オボス・オフンビの叙述はクラッツォララにみられるような列伝形式ではない点だけが相違点で、共通の先祖とされるアドラがこの地に定着した経緯を描写するくぐりぐぐりと近隣民族とのもろもろの紛争を記述する部分、マジャンガとブラ・カルトについての記述が類似点である。登場する民族の数も順番も、ときに引用される現地語の部分や偏りさえもまったく同じである⁵⁾。

ことによると、長老たちが口々に同じことを言っているのかもしれない。実際そうしたわずかな異同を具体的に検討しているパッカードの論文もある (Packard 1970)。しかし、その論文のもとになる調査が行われたのは、1969年から1970年で、オボス・オフンビの著書の出版からもうすでに10年近く経ったころであることもあって、むしろオボス・オフンビの著作の影響であるかも知れず、一概にそうとばかりは思えなかった。現地語で書かれているためにアルファベットが読めれば読むことができるオボス・オフンビの著作を決定版として、インフォーマントがそれに依拠して説明しようとするという出来事は、それを入手することが困難な現在で

もよくあることだからである。

たとえば、こんな具合である。

「…あの本があれば、あなたの知りたいことは全て答えてあげられると思うのだが、もうクランリーダーのところに寄付してしまったのでここにはないのだ…残念ながら…」あるいは、

「…手に入れているかどうかは知らないし、今では手に入れることも難しいのだが、その本に書かれているとおりで、つまりマジャンガは、…」といった具合である（マジャンガとは三世代ほど昔のジョパドラの英雄）。

さて、とにかくこの10年ほど隔てて出版された二つのジョパドラについての記述は、すでに加工された同じ資料を元にしたとしか考えられないほどに類似していた。私はそこで二つほど仮説を立ててみた。もっともありそうなことは、脚注で謝辞を送られているジョパドラ人教師がオボス・オフンビその人である、ということである。その次の可能性は、共通の現地協力者との接点を双方ともに持っていた、ということである。

もっとも、ある研究者の現地助手や現地協力者が誰であろうと、そんなことは取るに足らないことかもしれない。しかし、視野をひとたびその時代のコンテキストに置いてみて、民族や宗教などさまざまな要素との関連性として考察するとき、それは意外な展開を見せるかのように私には思われた。思えばそのときに個人のバイオグラフィへの関心がわずかに芽生えていたのかもしれない。

IV. オボス・オフンビからセム・コレ・オフンビへ

さて、クラッツォララとオボス・オフンビにつながりがあるとすれば、いったいそれはどういったものであったのか。

私は、初めてのことだが、すでに述べた二つの仮説をもってフィールドに出かけた。2001年の7月だった。オボス・オフンビとクラッツォララとの接点を探るために、それぞれのバイオグラフィについて調査すること

にした。私ははじめのうちは、現地でのインタビューでもそう示唆されることがあったりして、『パドラ』の著者であるオボス・オフンビが、クラッツォララ神父の現地協力者なのであると考えていたが、そう考えるといくつかの不都合が生じることにすぐ気づいた。それは、村のある長老（といってもまだ鬢髭とした）のひとりが、オボス・オフンビを若造呼ばわりしていたり、彼と大体同い年だ、という人物がそれほどの老人ではなかったりしたことがきっかけであった。日本ではオボス・オフンビのバイオグラフィなどは手に入らなかったし、マケレレ大学にも参考になる資料はなかったからであるが、私は勝手にクラッツォララの協力者と考えて、1950年以前に教員であった人物—つまり現在は少なくとも68歳以上、というよりも、もっとずっと高齢の人物を想定していたのである。

それは、クラッツォララがウガンダで過ごした時期や彼の経歴、オボス・オフンビのバイオグラフィが次第に明らかになるにつれてよりはっきりしたものになってきた。後に紹介する信頼するに足る資料によれば、オボス・オフンビは、1932年生まれである。生きていれば調査時には67歳である。冒頭の引用の記載された『ルオー』第二巻は1951年の発行であるから、クラッツォララ神父の調査が1950年近辺、あるいはそれ以前であったとすると、彼は18歳に満たない青年である。また、バイオグラフィを調べて明らかになった限りにおいても、彼が一度でも教師だったという証拠はない。ここで本論に関わる限りにおいてクラッツォララ神父とオボス・オフンビについて、一般的な知識を確認しておこう。

「CRAZZOLARA, FR PASQUALE (1884-1976). ヴェロナ・ファーザーズ・ミッションの一員で、…ウィーン大学とロンドン大学で学んだ言語学者・人類学者として著名。1910年、2年間スーダンで働いた後、ヴェロナ・ファーザーズが活動をはじめたウガンダに来た。はじめウエスト・ナイルのオマッチに派遣されのちにアチョリのグルに移った。そこで彼は最初のカトリックの教義教科書と学校のアチョリ語で書かれた教科書

作成の責任者であった。1911年から1912年までのラモギ反乱に導いた緊張緩和に助力するために招かれた。その後1928年永久にウガンダに帰ってくるまでは、主にスーダンで働いた。…」(Pirouet 1995: 126)

ここからうかがえるのは、彼がウガンダに滞在したのは、1910年からおそらく1912年ごろまでの短期間と、1928年から1976年の彼の死までの期間である、ということである。残念ながら彼がウガンダのどこに滞在したかは不明だが、ウエスト・ナイルのオマッチに1910年に、グルに1912年にヴェロナのステーションが設立され、その設立に彼が深く関わっていることから、どちらかに滞在していたことが推察される。オマッチのアルル族について彼がその生涯心血をそそいで研究したアチョリに比肩しうるほど、インテンシヴに研究したとは知られておらず、研究の分量から考えるとアチョリ族の本拠であるグルで多くの時間を過ごしたと考えるのが普通であろう。

さて、オボス・オフンビの学歴・職歴についてもわかる範囲で調査を行ったが、彼のファイルはまだ軍にあり、アーカイヴズには収蔵されていない。それだけではなく、ウガンダの脱中央集権政策のため、かつてはエンテベやムバレ、ジンジャなど歴史的な要地にあるアーカイヴに保存されていたファイルはそれぞれのディストリクトに分配されることになった。トロロ・ディストリクト・アーカイヴズは現在建築中につき閲覧不可能である。

したがってそのバイオグラフィに関わる資料は、聞き書きに基づいている。またその作業の過程で、彼の父セム・コレ・オフンビがキソコで教師をしていた、という新しい事実も浮かび上がってきた。

「…オボス・オフンビは当時キソコで教師をしていた父親セム・オフンビのもとで初等教育を受けた。その後ムバララ高校を経てブドのキングズ・カレッジのジュニア・セカンダリーに入り、刻苦勉励してシニア4レベルまで修めた。マケレレ大学になる前のマケレレ・カレッジで学ぶこ

とを希望していたが1951年に父が亡くなり、母と8人の兄弟姉妹の生活を支えるために勉学を中断、1953年ムバレの南ブケディ・コーポラティヴ・ユニオンにセクレタリーとして勤め始めた。1955年にはバニョレの女性アウマと結婚。その後ンサミジ・ナショナル・インスティテュート・フォー・カリキュラム・ディヴェロップメントを経て1960年にナイロビ大学に学んだ。1961年に帰国し、1962年に二度目の就職をする。一年間のグル・ディストリクトのアシスタント・ディストリクト・コミッショナーとしてのそれである。その後6ヶ月だけアルア・ディストリクトの今度は正のディストリクト・コミッショナーを務め、再度グルのディストリクト・コミッショナーとして迎えられ、二年間務めたのち大統領府の次官となり、1968年から1969年まで第一次オボテ政権の内閣書記官となる。1971年アミン政権時に大統領府のセクレタリー・フォー・ディフェンス、1972年に国防大臣に任命。1977年内務大臣に任命。1977年2月17日死去。」⁶⁾

複数の話者から総合したものだが、話者は、オボス・オフンビの妻、息子、義兄弟であるから、まず信頼できる資料であるといっておく。これによると、1951年に父のセム・コレ・オフンビがなくなるまでの間、彼はムバララやブドなどで就学していたわけだから、パドラにはそれ以前最低4年間は不在であることになる。クラツォララと面識があったとしても教師と呼ばれるには若すぎた。したがって、むしろ教師であったことが明らかな彼の父セム・コレ・オフンビが現地協力者であったか、現地協力者と何らかのインターフェースを持っていた可能性を考えるのが自然であろう。

V. セム・コレ・オフンビのバイオグラフィ

それでは、オボス・オフンビの父、セム・コレ・オフンビはどのような人物であったのか、同様にバイオグラフィを見ていこう。私は幸い彼を記

念してニャマロゴのオボス・オフンビ邸の隣に、コロブディにあるセム・オフンビの墓をのぞむかのように建てられたセム・コレ・オフンビ・メモリアル・チャペルの聖別式で配布された古い冊子を入手することができたので、そこでオボス・オフンビによって読まれたバイオグラフィを要約して紹介しよう。1972年の12月31日日曜日に開かれたこの式にはアミン大統領を始め、ウガンダ、ルワンダ、ブルンディ及びザイールの大司教エリカ・サビティも参加した盛大なものであった。主催者であり以下のバイオグラフィを草し、読んだのは、息子である当時国防大臣のオボス・オフンビである。

「…セム・K・オフンビは、1904年ころにムランダのコロブディで生まれ、1951年に4月3日にコロブディで死んだ。…若いころ彼は兄バトゥルマーヨ・オロー・ジャッボとともにブガンダに出稼ぎに行った。そこで学ぶことの喜びを覚えた彼は、働きながら刻苦勉励し、1919年にクリスチャン・ミッション・ソサエティ (CMS) と現在はチャーチ・オブ・ウガンダになっているネイティヴ・アングリカン・チャーチ (NAC) のレイ・リーダーと教師としてのトレーニングを受けたのち、1920年から1930年にパドラに帰るまでその資格でブガンダで働いた。まだキリスト教に十分な理解が得られず、ガンダやソガから来た伝道師に著しい拒否感を示すジョパドラへの布教に身を捧げる決意をしたのである。

1931年から1946年まで、彼はトロロ、ムランダ、キソコなどのパリッシュで布教活動を積極的に行う傍らムコノとブワラシ・カレッジの神学のコースに出席した。たとえば1929年には彼はムコノにいたし、1933年から1935年まではブワラシ（ムバレの一地域）にいた。ブワラシ・カレッジでは、のちに1955年、息子A. C. K. オボス・オフンビの妻となるエリザベス・M. N. オボス・オフンビの父でCMSとNACでセムと同じ地位に長らくあったヨラム・キゲニイも一緒だった。

故郷での彼は、家族の中ではじめにプロテスタントに改宗したものとし

て自分の家族を改宗に導き、それだけではなくパドラの土地の多くの人々の改宗にも大きな仕事を成し遂げた。

そうした布教活動にいそしむ傍ら、彼は自分の民族の歴史に生涯を通じて著しい関心を持ち続け、可能な限りの資料を蒐集した。その仕事は、息子 A.C.K. オボス・オフンビに受け継がれ、その手で『パドラ』として出版された。その書物は父セム・コレ・オフンビに捧げられた。

1946年の終わりに、止むに止まれぬ事情により教会活動から身を退き、1951年4月3日ムランダ・サブカウンティのコロブディで死んだ。オルワ・ラパ・クランからの妻エスター・マンジェリ・アロウォ・オフンビとの間に10人の子供たちをもうけ、A.C.K.をはじめとする3人の息子と、4人の娘を残した。

…教会の仕事から身を退いた後も子供の教育のことがあり、最後に働いていたキソコに住んでいたが、1950年健康状態を悪くし、8月から9月の休暇にムバララ高校から帰っていた私は病院から救急車を借りてトロロ病院に運んだことがある。退院してもなお、それほど芳しくなく、私が12月13日にムバララ高校から帰ってきた日に再び病院に運ばれ、4月3日まで病院にいた。そのときまでに医師はもう打つ手を失っていたので、彼の父と父の祖先の土地であるコロブディに運ばれ、長兄オスナ・ジャッボの家で午前11時ごろに亡くなり、次の日には埋葬された。

彼の死んだとき、私は家を離れ新しい学校—ブド・キングズ・カレッジ—にいた。1951年4月4日の水曜日、夕食も済んだ夕方遅くに彼の死を知らせる電報を受け取り、…」(下線部梅屋)⁷⁾

このように、セム・コレ・オフンビはブガンダでレイ・リーダーとなり、布教を通じてパドラのキリスト教関係者と深いパイプを作り上げていたことがわかる。したがって、キリスト教の何らかの活動を媒介としてクラツォララ神父と接点を持った可能性も出てきたのである。

また、この資料からは、オボス・オフンビの著書の背後には父セム・コ

レ・オフンビが生涯かかって蒐集した膨大な資料が存在していたことがうかがわれる（下線部参照）。言い換えると、それがクラッツォララと接点があろうとなかろうと、仕事をはじめたのはセム・オフンビだということだ。またすでにみたオボス・オフンビのバイオグラフィをみると、彼は意外なほどパドラで時を過ごしていない。幼少期を除けば、父が死去した1951年から1953年まではパドラにいたとしても、1953年からムバレに、7年後にはナイロビに、その二年後にはグルで職を得ている。父の資料を確認ないし補足する調査を行ったとすると、父の死からナイロビ大学にゆく9年間の間に調査と執筆を行ったことになる。

いずれにせよ、セム・コレ・オフンビは、問題のクラッツォララ神父の著書の第二巻が出版された1951年には世を去った。また父が病でも就学のために遠隔地におり、死にさえ立ち会えなかったことで、クラッツォララ神父とオボス・オフンビとの接点はほぼなくなった。あるとすれば、クラッツォララはオボス・オフンビが非業の死を遂げる前年まで存命なので、その期間に会っている可能性であるが、それは本稿のテーマである協力者探しからは外れる別のトピックとなろう。また、考えられる一つの別の可能性—つまりセムが教師の資格をとった後ブガンダで働いているとき(1920-1930)にクラッツォララに会っている可能性も、限りなく少ないが残っている。クラッツォララは1928年からウガンダに帰ってきているからである。

この献辞にふさわしく十分に形式的なバイオグラフィの紹介は、一人のエヴァンゲリスト、セム・コレ・オフンビがなぜせつせと口頭伝承をあつめて歩き回ったかという動機の部分を説明してはくれない。バイオグラフィは、詳細に検討するならば、その背景となる歴史的な状況、エスニシティ、宗教、政治、経済などをすこしずつではあれ語ってくれるはずである。セム・コレ・オフンビは実際のところ、いかなる人物であったのか。

じつは、オボス・オフンビによる献辞にも続けて経験に基づく形式的な

描写はなされてはいる。

「…私が生前の父に最後にあったのは、1951年の2月1日にお別れをいいにいったときのことでした、それは1950年の終わりにムバララ高校を修え、次の日2月2日に私が新しい学校―ブド・キングズ・カレッジに電車で向かうからです。12時お昼頃、短い会話の後、私にとって最後のさよならをいいました。彼はしかし、「私のことはそんなに心配するな。神があなたを健康に、そしてあなたのやる全てのことを祝福してくださいますように。」「忘れるな。私と妻のことはそれほど心配することはない。私が死んでも、おじがここにいる。彼が私を埋葬するだろう。いつも神を信じ、ただ一生懸命にやれ。強くあれ。そして勇気をもて。」こうした言葉の後、彼はいくらかの肉とスープを摂りました。ベッドで昼食を摂っていたからです。私はそれから扉を開け、最後に彼の顔をみて外に出、扉を閉めました。しかし、心の中では、これが彼に会う最後とは知らなかったとはいえ、そうなることをおそれていました。彼の健康状態はひどく悪化していたので、再び生きて会えないのではないかとおそれました。それから二ヵ月後の1951年4月3日に彼は亡くなったのです。

セム・K・オフンビは、生涯ずっととても強く勇気をもっていました。とりわけ、彼がする全てのことに付き、神が導きの星でした。父の友人たちは父に、「オソロ」 *othoro* という文字通りにはアリが扉を閉じたアリ塚というあだ名をつけました。この文脈では、彼がいったん決心するとあらゆる批判、反対などにまったく影響を受けないで目的を達成する人間だという意味です。このような勇気があったから、神に対する希望を失わずにこんなに長い間の苦しみの中でさえ、病院でも安寧に過ごせたのでしょう。彼の心配の主なものは、彼の死後に家族に起こること、わけでも子供たちの教育のことでした。父は貧しいひととして生き、そして死んだからです。さらに、父は故郷の彼の父の土地に小屋さえ建てていなかったのです。また、彼を慈しみ、とても気遣ってくれた年老いた母のことも心配し

ていました。父は母のこと、妻のこと、子供のことを心配して死にましたが、強く神を信じておりました。

全能の神よ、セム・K・オフンビに平安な休息を与えたまえ…」⁸⁾

ところが、その生涯を記念するチャペル建立のための儀式にふさわしい形式性のおかげで、これらの記述からは肝心の人物像そしてその人物を取り囲んだ背景が、キリスト教に殉じた部分とその強さ、頑固さ以外は、すっぱり抜け落ちているのである。そこで私は、それを人々の語りの中に求めようと、聞き書きの方針をバイオグラフィ重視に変更した。もちろん、クラッツォラの現地協力者が彼ではなく、問題の人物との接点を持つ人物かもしれない、という仮説は残したままで、である。

VI. パドラのキリスト教受容とセム・コレ・オフンビ

語られたセム・オフンビ像を紹介する前に、パドラにおけるキリスト教の歴史的受容の様態について触れたい。それは、仮説のどちらが正しいにせよ、セム・オフンビとキリスト教との接点が現時点ではもっとも有力な手がかりのひとつだからである。また、後の資料の背景に対する予備知識としても、彼の生きた時代以前そして彼の生きた時代に、キリスト教がどういった位置づけになっているかを確認しておかなくてはならない。

ここでは、いまのところ唯一のパドラにおけるキリスト教受容の過程を正面から扱っているオティエノ (Othieno 2000) の報告に従って述べる。

他の多くの新奇なものと同様、キリスト教もカクングルのブケディ侵略と1900年の英国植民地行政府の確立につづいてパドラにもたらされた。はじめも個人で来た宣教師たちはいたようだが、組織的にパドラに入ってきたのは1903年にまずカトリックが積極的に動き出してからのことである。もっとも、1901年から植民地行政府によって課された「ハット・タックス (小屋＝住宅税)」への反感から、少なくとも不穏な動きや実際の物理的な衝突は後を絶たなかったから、何人かの死者を出して終結する

1905年までは、その活動は慎重なものであった。

その年、1903年に、レヴランド・キルク神父がブダカにある教会からナゴンゲラを訪れた。数年後に帰る折り、カサカ・ボゲレという名のキリスト者を当時のルウォース（一応チーフとしておく。主に軍略と宗教的リーダーシップを司る存在。）、ナゴンゲラのオロー・マジャンガのもとに残していった。それは、1908年1月13日と記録にある。当時のジョパドラにおいて権力を掌握していたマジャンガのもとに彼を残したことは、この地へのキリスト教布教の布石となった。

1912年10月30日には、再びビショップ・ビーマンズがブダカからナゴンゲラを訪れた。一年足らずして彼がブダカに帰った後の1913年、ミル・ヒル・ファーザーズのウィルマン神父がカトリックの支部づくりに着手し、1914年にはプレイデ神父が修道院長、ウィルマンがアシスタントとして、カトリック、プロテスタントともキリスト教としてはじめてのセンターがパドラのナゴンゲラに完成した。

いっぽう、プロテスタント側は、1925年にCMSがパドラのキデラにつくったセンターがプロテスタントとしてはじめてのセンターであった。ここで通常の儀式は行えたが、洗礼を受けるためにはこれまでどおりパドラに隣接してはいるがそう近くはないサミア人の地サミア・ブグウェのブシアの教会にゆかねばならなかったし、雨季にはスワンプに囲まれて孤立するなど、このセンターの必ずしも立地条件はよくなかったといわれている。

そこで新しい土地を物色し始め、はじめキソコで土地を譲り受けてセンターをつくったものの、1926年にムバレのカブワンガシから視察に訪れたブダマのアーチディーコン（大執事）、マンジャシとその一行は気に入らず、別の土地を探すことになる。それは、そこが低地だったためといわれ、パリッシュ・チーフのブラシオ・ワセンダの手配で選ばれたキソコ・ヒルの今の土地は高地であるために選ばれたともいわれる。マンジャシ

は、1927年にガンダ人エリア・ムチャキを派遣し、1930年にはカブワンガンシからランプレーがパドラ・サブディストリクト・アーチディーコンの肩書きで派遣され、同年にキソコ教会の定礎式をみた (Othieno 2000: 27-29).

さて、前述の経歴によるとセム・オフンビは、プロテスタントで、CMSのレイ・リーダーで教師、しかも1930年まではブガンダにいた。つまり、ここから先がセム・オフンビがこの地域の布教に関わってくる部分なのである。さて、これらの事実は実際想像以上に重い。オティエノによれば、キリスト教は、こののち伝統的なパドラのイデオロギーとコンフリクトを経ながらも、西洋風の教育、経済などのイノベーションを次々にパドラに送り出す。そもそも、現在でいう学校や教育はこのころにはまだなかったのだ。セムはパドラで、おそらくジョパドラとしては第一世代に近い、稀な資格を持った教師であり、エヴァンゲリストであったろう。クラッツォララがさりげなく書いた「ジョパドラで教師」というのは、実に大きな限定性を持っているのである。ただ、それだけでは彼がクラッツォララ神父の協力者その人であるという決定的な証拠にはならない。

セムのエヴァンゲリストとしての役割はわかったとして、問題はセム・コレ・オフンビはプロテスタントでムランダおよびキソコにおり、クラッツォララが頼ったと思われるナゴンゲラのミル・ヒル・ファーザーズはカトリックであるという事実である。それは、ウィルマンなのだろうか。この地域のみならず、カトリックとプロテスタントの確執は表面上はともかく実際には根深いものがある点もなお考慮に入れなければならない。

VII. 現地でのセム・コレ・オフンビ像

VII-1. 力溢れるエヴァンゲリスト

これまでのクラッツォララの現地調査者探しの過程で手持ちの文書によって行える探索はすでに万策尽きた。セム・コレ・オフンビのキャラク

ターについても、神を厚く信じ、強く、勇気ある、他人に付和雷同しないという形式的な—いわば正面の顔しか見えてこなかった。しかし、人には正面の顔もあれば裏もあり、また横顔もあるだろう。言い換えると、そうしたセム・コレ・オフンビ像の記憶が現地の人々にいかに語られるかを提示する準備は整ったように思われる。ここでは、インタビュー資料をもとにセム・オフンビの横顔を描き出していこう。

すでに述べた経歴の部分は、驚くほど少ない年代の細かい偏差やミチャキやランプレーに与えられる役割を除けばオボス・オフンビの読み上げた経歴とほぼ符合する。これらの点についての人々の記憶の正確さにはたびたび瞠目させられた。既にみた、キソコにCMSがセンターを開いて以降のセム・コレ・オフンビの仕事についても詳細な叙述を得ることができる。

「…彼はムランダ・サブカウンティ、コロブディのオボ・コレの子供のひとりである。彼は、キソコ・サブカウンティで働いていた。彼はブガンダで幼児教育とキリスト教を学んだ。そのころは、知識を得るためなら、国の端まで徒歩で旅行したものだから、腐らない食料をよく持っていった。たとえば、ローストしたキャッサバ、粉にした胡麻なんかだ。それは、大体1800年から1900年くらいのことだろうが、もう詳しいことはわからない。…それから、セム・オフンビは、帰ってきてムバレのブワラシにある神学校にも通った。それで教えることができるようになったのだ。そのころ白人のミッションがあっちのほうにいたのだ。ナゴンゲラにはウィルマン（多く的人是ウィリメニと発音）神父がローマン・カトリック・チャーチから来ていて、キソコでは、白人、英国人（オランダ人とも）のレヴランド・ランプレーがいてムランダではセム・オフンビが任命されて教えを説いていた。このころだったか、オボス・オフンビの母に当たるマンジェリ・アウマと一緒にしたのは、彼はひどく熱心なキリスト者で、3年後にはキソコのヘッド・コーターズに派遣され、ランプレーと働い

た。ついにはパリッシュ・レベルのキリスト教徒の管区長にも任命された。それは、だいたい1930年から31年くらいだとおもう。…キソコでは、プライマリー以前のナーサリー・スクールをはじめた。…彼は、自分の子供でない子供を数多く育て、必要な教育も与えていた…学校の名前は、スィクル・パ・ミシャキ。いまのキソコ高校である。…はじめはジョパドラでないレヴランド・ミシャキ（前述のミチャキのこと）といっしょに働いていた。この人の名前が学校についたのだ。それが1939年まで。そのあとオランダ（英国とも）から来た白人のランプレーが代わりになって1947年まで働いていた。それは、イタリア人ウィルマンがナゴンゲラにきた年と同じだったと思う…」⁹⁾

もちろん、なかにはセム・オフンビの横顔を知るうえで重要と思われる文書にはみられないいくつかの点もある。それは、たとえば、彼が飢饉に際し、援助物資をひとびとに配給するくだりである。

「…1944年に、東部のすべてのコミュニティを「ケッチ・マウエレ（マウエレの飢饉）」という大きな飢饉が襲った。マウエレは、実は、後に続く一連の不幸の扉の入り口に過ぎなかった。マウエレというのはその時期に配給された黄色い小麦粉のようなものの名前だ。これは、海外からミッシェンと植民地行政府のチーフによって配給された。だから、レヴランド・ランプレーも、セムもこの配給に実際に関わっていた。そのときには、新種のキャッサバを配ったりもした。それはチェリ・チェリ *chieli cheli* という名前のキャッサバである。そうしたランプレーとの活動は彼をますます有名にした…」¹⁰⁾

こうした活動の背景には、セム・コレ・オフンビへのCMSの高い評価と厚い信任があったようである。教会の所有物に対する責任を一手に任されていたという証言もあり、ランプレーとの共同作業も非常に実り多いものであったという。こうした責任感が彼を予想もしなかった不幸に導いたらしいことも、次第に明らかとなった。

VII—2. 知られざるセム・コレ・オフンビ

すでに紹介したメモリアル・チャペル建立の式典でオボス・オフンビの読んだセムのバイオグラフィのなかには、非常に不明確な記述があることを、指摘したい。それは、「…1946年の終わりに、本人が止むに止まれぬ事情により教会活動から身を退き…」という彼のリタイアについての記述である。原文でも、“Semu K. Ofumbi was forced by circumstances beyond his control to retire from the Church Services at the end of 1946.”と、きわめて歯切れが悪い。病氣を得るのは、1950年のことであるから、健康にして42歳で引退することになる。一体何があったのだろうか。

実は、その二年程前に、セム・オフンビだけではなくその息子オボス・オフンビにも影響を及ぼしたとされる大事件が起こったのである。それは、聖職者とはもっとも結びつきにくい行為—殺人—であった。

事件は、例のケッチ・マウェレの最中に起こったらしい。

「…ある運命的な晩、…その事件が起こったころ、セムはニョレのマシガという人と働いていたのだが、それは、ランプレーがキソコ・チャーチ・オブ・ウガンダの定礎を置いた年であった。セムはカムという友人と歩いていた。彼はパリッシュ・チーフだった。帰りがけにキャッサバ畑を見回ったとき、ラモギ・クランのオクム（テソ人とも）という男がキャッサバを掘り出して袋に詰めているのを見つけた。そのキャッサバ畑は教会の畑であった。セムは男をとらえ、その場で殴り殺してしまった（指示しただけとも）。ラモギ・クランのひとびとはそれを恨みに思い、いまでもセムのクランであるニレンジャとは関係はわるいままである。友人であったマシガもいっしょに働くのをやめてブニョレに帰ってしまった。彼はじつはオクムの友人だったので友人が殺されたのをいたたまれなかったのである…それからというもの、彼は生涯アルコールを飲まなかった。

そのことがあってしばらくして、ひとびとは死んだオクムを憐れむ歌を

つくった。オクムを悼む歌の意味はこういうことだ、オクムはランプレーの友人だったのになぜ助けなかったのか、ということだ。マシガもなぜ助けなかったのか、ということだ。そのとき盗んだとしても死ななかつたらもう二度とはしなかつただろうに、というようなことだ。いまはもう歌うものはないが、そのころキソコでは誰もが歌っていた。

セム・オフンビはそのことがあってからもしばらくキソコにいたが、オクムを憐れむ歌に悩まされたこともあって、ムランダのコロブディにある故郷へ帰ることにした。故郷に帰ってからは、セム・オフンビは病を患い、すぐに1950年ころにムランダ・サブカウンティ、コロブディで死んだ…」¹¹⁾

私はオボス・オフンビ邸で、おそろおそろオボス・オフンビの息子、兄弟、そして妻の前でこの事件について聞いてみた。息子の回答は自分は若すぎるから知らないが、ありそうなことだと思う、とっても気性の激しい人だったようだから、というものであった。故オボス・オフンビの兄弟つまりセム・コレ・オフンビの息子のひとは、多くは語らなかったが、「それは、事実だ」とのみあっさり言った¹²⁾。

もちろん、聖職者が盗人とはいえ、殺人を犯した事実のインパクトの大きさは、どんなに多く見積もっても過大評価にはならない。しかし、ひとびとはそうした形でこのエピソードを終わることはほとんどなかった。それらの末尾には、積極的にではないが多くの場合、次のような解説がつけられるのである。

「…人を殺すと死者のティーボ（いちおう霊と訳しておく）が殺したのやその家につきまとう。殺したものがはじめに見た人、会った人、はじめにはいった屋敷、それから死体をはじめに発見した人、全てがそういう目にあう。それからティーボは強力だから、どんなジャスィエスィ（呪医と訳しておく）もそれを制御することなどできはしないと信じられている。この霊の影響力は世代を超えて継続するのだ…」¹³⁾

最後のフレーズには補足が必要だろう。実は、現在ニャマロゴにあるオボス・オフンビ邸には奇妙な噂がつきまとっている。あの場所では既に二人の人が奇怪な死を遂げている。うち一人は蛇に噛まれて死んだ。息子のオボス・オフンビも非業の死を遂げた…などである。つまり、彼らはオクムのエピソードを通じて、ニイレンジャのセム・オフンビの呪われた系譜について語ろうとするのである。

VIII. おわりに

さて、残念なことに、これまでのところの顛末のうち報告すべきことは次第に終わりに近づいている。議論を再びクラッツォララの現地協力者探しに戻そう。これまでの到達点は、以下のとおりである。オボス・オフンビは、『ルオー』の出版以前には教師ではなく、クラッツォララとの接点をもつことは難しい。これで現地協力者がオボス・オフンビである可能性は全く消えた。現地協力者との接点を持つとすれば、1951年から1960年までの間であるが、この間については利用できる情報が現在のところない。

彼の父セム・コレ・オフンビは、教師であり、現地協力者の当事者である可能性が有力な候補である。未だに彼自身が現地協力者であった可能性も、現地協力者と接点を持っていた可能性も残されている。彼自身が現地協力者ではなかったとしても生涯を通じてジョパドラの歴史に関心を持ち続け、資料を蒐集した彼が、他の似たような仕事をしている人物に関心をもたないはずがないからである。また、彼がガンダで教師をしていた期間のうちクラッツォララ神父がスーダンからウガンダに帰ってきてからセム・オフンビがトロロに帰るまでの時期すなわち1928年から1930年の間に接触を持った可能性も残されている。

そして、最後にパドラの現地調査で得た資料からは二つの手がかりが残った。一つ目は、2001年9月11日、当時74歳でまだ存命だった

(10月はじめに死去)もとアーチビショップ・ヨナ・オコスの証言である。彼は、件の私の質問にこう答えた。つまり、冒頭のクラッツォララからの引用に見られるジョパドラ人教師とは、誰だろうか、ということである。「それは、セム・オフンビその人に間違いはない」。

ヨナ・オコスは、ナゴンゲラに長く住んでいた人物で、オボス・オフンビが暗殺される直前にはアーチビショップ・ジャナニ・ルウムと鉱物資源大臣オリエマと謀ってタンザニアから武器を密輸し、自宅に隠していたと政府に発表されたことのある人物である(本人は否定)。たとえば、*The Uganda Almanac and Record Book (First Edition)* 1999. の30ページには、「…ラジオ・ウガンダは…さらなる兵器がトロロのアングリカン・ビショップ(当時)ヨナ・オコスの自宅近くから発見されたと報道した…」とある。オボス・オフンビが同様の容疑で殺害される前日の放送である。セム・コレ・オフンビ一家とは、現在に至るまで親交がことさら厚いため、証言についての信頼性は高い。

しかし、ヨナ・オコスはウィルマンやランプレーについては言及したが、クラッツォララについては何も知らないようだった。クラッツォララとの接点がみつからない以上これだけでは有力な証拠にはならない。私が面会したとき既に病床にあった彼は今はもう亡く、再度確認する手段も絶たれてしまった。

もうひとつの手がかりは、セムと一緒に働いていたとされる白人宣教師、レヴランド・ランプレーの妻にまつわるものである。彼女は、どうも研究者だったようなのである。

「レヴランド・ランプレーの妻は研究者だった。セムはよくジョパドラのことばを通訳していた。同じ教会の同僚のミサキ(前出のミチャキ)はガンダ人だったから、ガンダ語の通訳は彼がしていた。彼は地域の宗教的リーダーとしてランプレーの妻の通訳も務めていて彼女のキソマ(勉強・研究)を助けていたが、その内容までは誰も知らない。でも、ランプレー

は奥さんと一緒に来た。名前は覚えていないが、彼女は人々の中にはいついていろいろな聞いて回るのが好きだった…セムは、英語が少しとあとガンダ語ができた。今でもそうだが、プロテスタントの教会の行事は全部ガンダ語なのでランプレーの妻の通訳として働いていたのだ。」¹⁴⁾

さて、ここまできてこれまでの私のクラッツォラ神父の現地協力者探しは、ついに暗礁に乗り上げた。もちろん、そのとき推定6万足らずの人口だったといわれるジョパドラにセム・コレ・オフンビのような資料蒐集が可能でしかも教師の職にあった人々が何人もいるとは思われないが、確証はついには得られずじまいだったのである。

クラッツォラ神父の現地協力者探しを続けるとき、今後行われるべきは、レヴランド・ランプレー夫人とセム・コレ・オフンビがどのような協力関係にあったかをより詳細に検討すること、それからセム・コレ・オフンビ自身ないしレヴランド・ランプレー夫人とローマン・カトリックでクラッツォラ同様イタリア人であるといわれているウィルマンの接点、更にはクラッツォラとウィルマンの接点の追求である。パドラではセム・コレ・オフンビとランプレー夫妻、そしてウィルマンが何らかの鍵を握っているはずなのである。

そういった追及を行うには、むしろジョパドラ側からというよりは、クラッツォラ神父のバイオグラフィとローマン・カトリック側の資料、さらには個人的な交友関係などから手がかりを求めるしかないのかもしれない。それには、未だに入手できないでいるミル・ヒル・ファーザーズや、ローマン・カトリックの資料やアーカイヴズ資料などはもちろん、オマッチやグルなどに地域的な視野を広げた新たなネットワークに基づく調査計画が立てられなければならない。それらの作業は今回セム・コレ・オフンビの意外な横顔を通じて垣間見ることのできた、バイオグラフィの背後に横たわる、古くて新しい人類学の刺激的な問題群とも、確実に通底しているはずなのだ。そう考えると、クラッツォラ神父の現地調査者探しに失

敗してその代わりに私が改めて知ったことは、歴史的民族誌における個人のバイオグラフィ研究の重要性であったかもしれない¹⁵⁾。

註

- 1) ジョパドラ *Jopadhola* (単数はジャパドラ *Japadhola*, その居住地はパドラ *Padhola*, その言語はドパドラ *Dhopadhola*) は、ウガンダ東部のエルゴン山まで次第に標高を高める平原にあるトロロ・ディストリクト、ウエスト・ブダマ・カウンティを中心に住んでいるナイロティック系の言語を話す有畜農耕民である。標高約 1080 メートルから 1200 メートルの若干乾燥した起伏の激しい平原で、年間降水量は約 1016 ミリから 1651 ミリといわれ、うち 4 月から 9 月までが 61.6 パーセントを占める。一般に乾燥しており、時期によってはツエツエ蠅の被害を被った。主食は彼らの言語でカル *kal* と呼ばれるフィンガー・ミレットを湯でこねた団子クゥオン *kwon* やドゥマ *duma* というトウモロコシの粉を練ったポーショ *posho*, またプランテーンを蒸したマトケであるが、トウモロコシとプランテーンは、地域外から購入することが多い。この土地で収穫されるバナナのほとんどは食用にはならず、ムウェンゲ *mwenge* という酒に醸造されるか、更にングリ *nguri* という酒に蒸留して消費される。フィンガー・ミレットから醸造されるコンゴ *kongo* は、儀礼やレクリエーションで必要不可欠である。現金収入は綿花によって得ていた時期が長かったが、需要の縮小に伴ってその生産と輸送・販売を行う協同組合もさほど目立った活動をしているとはいえない。宗教はキリスト教がカトリック・プロテスタントともによく普及しているために伝統的なパンテオンは表面上消失しつつある。1991 年のセンサスでは 24 万 700 人の人口を擁するといわれている。彼らは、ウエスト・ブダマの土地を生態と移住の記憶に基づいて三つに分類している。センダ、ナゴンゲラ、パヤなど西部は彼らが最初に住み着いた地域とされ、森林を意味するルル *Lul* と呼んでいる。次に移り住んだとされている南部をマウェレ *Maweale* と呼び、最近移住した標高の高いヨ・ウォコ *Yo woko* はその地名自体が外部を意味している。このうちマウェレという地名の由来についてはどの論者も謎としてきた (Southall 1957, Ogot 1967, Sharman 1969, Odoi-Tanga 1992, Ogola-Yokana 1993, 梅屋 1999)。後述するが、これは飢饉のときに教会や政府から配給されたソルガムに似た穀類の粉の名称である。その飢饉の名もケッチ・マウェレ *kech maweale* (マウェレの飢饉) という。ジョパドラとは、彼らの言語ド

パドラ *Dhopadhola* で、直訳すると「アドラの場所のひとびと」という意味である。細かく見ると「ひとびと」をあらわす接頭辞 *jo* と、場所をあらわす *par* それに、共通の祖先とも、彼らを率いてきたリーダーともいわれる人物の名アドラ *Adhola* とが、組み合わせさった語である。

ジョパドラの名は、Bryan and Tucker (1948: 17-8) や Crazzolara (1951: 315-323), Butt (1952: 13) などに見られるのが比較的初期の報告であるが、その場合も十分な質・量の報告がなされていたとはいえない。たとえば、Butt (1952) には、わずかに下記の記述がみられるにすぎない。「のこりの2, 3のナイロティックに分類されるグループは、リストを完全なものにするためにここで言及されるものの、ほとんど文献を欠いているために進んだ議論はされていない…JO PADHOLA ムバレ・ディストリクトのケニアとウガンダの境界にあるエルゴン山に位置し、南東のルオとは狭いバンツールのウェッジによって隔てられている。北はナイル・ハム系のテソに接している。ジョパドラはウガンダの1931年のセンサスで、4万9683人とみられている。彼らは自ら Jo Padhola と名乗るが、近隣のバンツール諸族からはブダマ Budama と呼ばれている…」(Butt 1952: 12-3) C. W. Hobley (1902) には自称 Ja-Luo, Bantu Kavirondo からの他称 Awa-Nyoro, 一般名 Wa-Nife として言及されているいわゆるナイロティック・カビロンドについての報告のほとんどは、今日ジョパドラとわれわれが呼んでいる民族集団の特徴を示している。

- 2) Southall, A. 1957, Padhola: Comparative Social Structure. mimeo, unpublished paper presented at the Conference, January, 1957, East African Institute of Social Research.
- 3) Ogot, B. A. 1967, A History of Southern Luo, Vol. I: Migration and Settlement 1500-1900. Nairobi: EAPH.
- 4) オゴット教授には、1997年と2001年の二回、マケレレ大学歴史学科長を通じてそのテキストを閲覧させてほしいという主旨の書簡を送ったが、2001年12月現在、返信はない。
- 5) 梅屋(1999)は基本的に Crazzolara (1951) に沿ってマジジャンガやブラ・カルトについても紹介している。また、ある程度以上隔たった祖先や歴史について長期保存される伝承が乏しいというジョパドラの一般的特徴についても付け加えておく。
- 6) 2001年9月19日、ニャマロゴ、オボス・オフンビ邸にて行われたインタビュー。主な話者はオティティ・ゴドフリー・ヨラム・オボス・オフンビ氏と、エリザベス・ミリカ・ナマンゲンバ・オボス・オフンビ夫人ほか。

- 7) *The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda on Sunday, 31, December, 1972.* Entebbe: Government Printer. pp. 1-4.
- 8) *The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda on Sunday, 31, December, 1972.* Entebbe: Government Printer., pp. 5-6.
- 9) 以下、公開できる範囲でインタビュー資料について記す。2001年8月20日、ニャマロゴ、ジョン・オボヤ氏(40)ほか。2001年9月19日、ニャマロゴ、オボス・オフンビ邸にて行われたインタビュー。2001年9月20日、トロロ、W. C. E. オウオリ・カブル氏(73)。2001年9月20日、ドミニク・オコス氏(79)ほか。そのほか数度に渡りスィワのオロー・オタバ氏(61)には助言をいただいた。
- 10) 主な資料は2001年8月20日、ニャマロゴ、ジョン・オボヤ氏(40)ほか。2001年9月20日、トロロ、W. C. E. オウオリ・カブル氏。そのほかコロブディのオベリ・ヤイロ氏、ドノシオ・オボ氏、トロロのエフレム・オティエノ氏(70)などとのインタビューに基づく。
- 11) 2001年8月20日、ニャマロゴ、ジョン・オボヤ氏(40)ほか。その他に、キソコのオマディア・ジョゼフ氏、アレックス・オコンゴ氏などとのインタビュー資料。
- 12) 主として2001年9月19日、ニャマロゴ、オボス・オフンビ邸にて行われたインタビュー。主な話者はオティティ・ゴドフリー・ヨラム・オボス・オフンビ氏と、エリザベス・ミリカ・ナマンゲンバ・オボス・オフンビ夫人ほか。
- 13) 2001年8月20日、ニャマロゴ、ジョン・オボヤ氏(40)ほか。キソコ、オマディア・ジョゼフ氏など。
- 14) 2001年9月20日、トロロ、W. C. E. オウオリ・カブル氏(73)。オティティ・ゴドフリー・ヨラム・オボス・オフンビ氏と、エリザベス・ミリカ・ナマンゲンバ・オボス・オフンビ夫人ほか。ドミニク・オコス(79)氏ほかの言説に基づく。
- 15) 個人の生涯を通じての営みの記録であるバイオグラフィは、それが書かれていようと誰かに公式の場で読まれようと、あるいは日常生活の中で語られ

ようと一つまり媒体は問わず、何よりもそれらを取り囲むシステムによって有利だったり不利だったりする状況を如実に表している。そうしたバイオグラフィの詳細な検討を通じて、人が生まれてから死ぬまで、生きてゆくときに彼がとった戦略とそれを取り巻いて規定していたもろもろの変数が、文脈的に統合されて単なるサンプルや事例の位置を超えて一貫した流れをもったトータルな様態として理解されうるだろう。そうした手続きは、システムごとに捉えるよりはそれぞれの人物の個別性や特殊性、例外性が強調され、システムとしての明快さや一般性を犠牲にするかもしれない。しかし、それらはこの試みに続く作業によって適宜修正されてゆく性質のものである。ここでのこのようなアプローチは、何よりもまず当該民族集団の成員のバイオグラフィに対する関心の高さを反映したものである。事実、彼らは他人の人生経歴について驚くほど詳細な知識と関心とを有している。とりわけここでとりあげたような、際立って出世した高名な人物についてのそれは、語る話者によってさまざまな解釈で脚色されて、何よりも話者の価値観や解釈のものさしを投影する格好の資料でもある。それらの言説は、単に歪められた事実をのみ伝えているのではなくて、その社会の常に動いていてその内部に多様な矛盾をも内包する社会の磁場を表象しているのである。また、本稿の議論とネイティヴ・インフォーマントについての議論 (Spivak 1999) とのリンクは他日を期することにする。

参考文献

- Bryan, M. A. and A. N. Tucker 1948, *Nilotic and Nilo-Hamitic Language of Africa*. London: Oxford University Press.
- Butt A. 1952, *The Nilotes of Sudan and Uganda, Ethnographic Survey of Africa*. London: Stone & Cox Ltd.
- Crazzolaro, J. P. 1937, "The Lwoo People." *Uganda Journal*. Vol. V. (no. 1), pp. 1-21.
- Crazzolaro, J. P. 1951, *The Lwoo PartII: Lwoo Traditions*. Verona.
- Hobley C. W. 1902, *Eastern Uganda: An Ethnological Survey*. London: Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.
- Oboth-Ofumbi, A. C. K. 1960, *Padhola*. Kampala: East African Literature Bureau.
- Odoi-Tanga 1992, "A History of Cotton Production in Padhola County of Eastern Uganda, 1925-1990." unpublished, M. A. Thesis. Dept. of History,

Makerere University.

Ogola-Yokana 1993, "The Bukedi Riots of 1960 with Special Reference to Padhola: A Study of Peasant Uprising against Colonial Rule." unpublished, M. A. Thesis, Dept. of History, Makerere University.

Ogot, B. A. 1967, *A History of Southern Luo, Vol. I: Migration and Settlement 1500-1900*. Nairobi: EAPH.

Othieno, R. 2000, "A History of Conflict between Christianity and Traditional Religious Practices in Padhola, Tororo District, 1900-1962." unpublished, B. E. Research Report, ITEK, Makerere University.

Packard, R. M. 1970, "The Significance of Neighborhoods for the Collection of Oral History in Padhola." *Uganda Journal*, 34(2), pp. 147-62.

Pirouet, M. L. (ed.) 1995, *Historical Dictionary of Uganda*. (African Historical Dictionaries, No. 64.), Metuchen, N. J. & London: The Scarecrow Press.

Sharman, A. 1969, "Social and Economic Aspects of Nutrition in Padhola, Bukedi District, Uganda." unpublished, Ph. D. Diss. University of London.

Southall, A. 1957, "Padhola: Comparative Social Structure." mimeo, unpublished paper presented at the Conference, January, 1957, East African Institute of Social Research.

Spivak, G. C. 1999, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Cambridge: Harvard University Press.

梅屋 潔 1999, 「起源伝承から『棍棒を携えた闘い』まで—ウガンダ・パドラにおける歴史と記憶—」宮家準編『民俗宗教の地平』春秋社, pp. 413-431.

その他参照資料

The Uganda Almanac and Record Book (First Edition) 1999, Kampala: The Monitor Publications Ltd.

The Form and Order of Memorial Service of Semu K. Ofumbi at Korobudi, Mulanda and Service for the Consecration Dedication and Blessing of Semu K. Ofumbi Memorial Chapel St. Paul's Church, Nyamalogo, Mulanda on Sunday, 31, December, 1972. Entebbe: Government Printer.

[付記] 本稿のもとになる調査には、日本学術振興会特別研究員（平成8年度DC2）に支給される文部省科学研究費特別研究員奨励費及び、平成13年度笹川科学研究助成金を用いている。記して感謝する。